学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.92 2014年9月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2014年9月22日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

MBA

中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.31

＜「過去問指導」で生徒の夢の実現を応援しよう！＞

夏期講習が終わり、2014 年もあと４か月となりました。８月の終わりから、９月の初めにかけて、塾業界では大きなニュースがありました。

その一つは、皆さんもご承知の「代ゼミ」の 20 校舎閉鎖と、2015 年４月からの全国模試の中止、来年１月のセンターリサーチの中止です。代ゼミは、サテラインに資源を集中するそうですが、私が８月のメルマガでも指摘したように、不動産業にもしっかり進出するのではないでしょうか。

もう一つは、明光義塾のメガフランチャイジーであるマクシスグループが、明光義塾本部に 87 校舎を売却することが９月１日に決定しました。明光義塾全体としては、教室数は変わりませんが、「明光に加盟していても旨みがなくなった」ということの一つの事象かもしれません。以前のように儲からなくなったので売却したのかもしれない、ということです。

この他にも資本提携の話、M＆Aの話がありました。塾業界は、まさに地殻変動をしているのかもしれません。読者の皆さんのすぐそこにも、その波が押し寄せているのかもしれないのです。ぜひ、自塾の進む道をしっかり定めて、進んでいってください。

さて、今回は、受験まで残りおよそ半年となったので、受験には欠かすことのできない『過去問指導』について取り上げてみたいと思います。現業の総仕上げとしての「合格を出す」作業です。

１．過去問題演習の意味

過去問指導とは、言うまでもなく、受験生に対して入学試験の過去問題を解かせて、それに対するリアクションをしていくことです。では、受験生が過去問題を解くことにどんな意味があるのでしょうか。私は、以下の４点のねらいがあると考えています。

①入試に対する総合力を身につける
②自分の弱点教科・弱点単元を知る
③受験校の出題傾向を知る（慣れる）
④学校の思想を知る（私立中高の場合）

それでは、これらのねらいを一つずつ見ていきましょう。

①入試に対する総合力を身につける

入試本番で力を発揮するためには、今までの学習を総合した力が必要になります。ですから、以下の力を養成するために過去問指導を行います。

- **制限時間内に一定の問題量を解き切る力**
- **制限時間中、問題に取り組む集中力**
- **問題を取捨選択する判断力**
- **問題を解く上での単元横断的問題解答力**

時間に限りがあるため、カリキュラムが進行中の普段の授業で、これらの能力を培っていくのはなかなか困難です。そこで、生徒に実際の入試問題を家庭で（または自習で）解かせることで、これらの能力を向上させていくことが必要なのです。（話は逸れますが、同様の理由で、模擬試験を多数生徒に受けさせることの重要性も分かっていただけるでしょう。）

②自分の弱点教科・弱点単元を知る

入試は、今まで習ったことのどこが出るのか分かりません。社会・理科では顕著ですが、高校受験に臨む中３生が、「中１で習った地理の内容をまるまる忘れている」ということはよくある話です。数学なら、「計算は得意だが、図形が解けない」、「関数はわかるけど、図形と関数の複合問題だと解けない」、など、教科・単元によって生徒の弱点は必ずあります。

しかし、普段の授業は単元ごとのカリキュラムになっているため、なかなか、その弱点が発見しづらく、入試ぎりぎりに弱点が分かっても、その時はすでに手遅れである、なんてこともあります。こういう事態を防ぐためにも、これからの時期、定期的な過去問題演習が必要なのです。

③受験校の出題傾向を知る（慣れる）

当然ですが、過去問題演習では自分の志望する学校の入試

合資会社マネジメント・ブレイン・アソシエイツ
教育コンサルタント　中土井鉄信

問題を解かせるケースが圧倒的に多いはずです。これは、入学試験には、その学校ごとに（公立高校入試では県ごとに）ある決まった出題傾向があるからです。

例えば、神奈川県の国語は（他県もほとんど同様ですが）漢字の書き取りの出題は、小学校で習う漢字、いわゆる「教育漢字（1006 字）」からしか出題されません。それも小学校５・６年生が圧倒的に多いのです。文章題は、小説・論説・古文の三題で、随筆は稀にしか出題されません。このようなことを知って受験に臨むのと、何が出るのか皆目分からずに受験に臨むのとでは、雲泥の差であります。

「書き取りの練習は５・６年生の漢字中心で、一番最初に得意な古文から解く」というような戦略が立てられるのも、過去問演習の重要な要素です。

出題傾向を知り、それに慣れるために過去問を繰り返すということには、生徒も一番納得してくれることでしょう。

④学校の思想を知る（私立中高）

これは、私立中学、私立高校にあてはまることなのですが、入学試験にはその学校の思想、言い換えると「欲しい生徒像」が表れます。難関国私立中学受験の場合は、なおさらこの傾向が強く出ます。問題は、受験生に対するメッセージなのです。ですから、 入試問題を解くということは、その学校と自分の相性を知るということになるのです。

以上、４点が過去問題演習の意味です。過去問指導というのは、この４点を指導することなのです。つまり、生徒の総合力を育て、弱点を補強し、出題傾向を教え、学校の求める生徒像に合うように生徒を鍛え上げるということです。

２．過去問指導実施要領

それでは、具体的な過去問指導についてお伝えします。

Ａ．実施時期

○私立中学受験：９月～１０月以降
○公立高校受験：１０月後半以降
○私立高校受験：９月～１０月以降

おおよそ、上記の日程で始めるのがいいでしょう。告知は最低でも２週間前ぐらいに行ってください。公立高校受験者は、全単元が終わっていないかもしれませんが、未習範囲は飛ばすなどの指示を与え、演習させてください。

Ｂ．指導の流れ

＜過去問題演習のやり方⇒以下の内容を生徒にしっかりと明示して取り組ませる＞

１．過去５年分を最低３回はやる。併願私立は直近３年分を最低１回はやる。（公立高校を第一志望とする場合）

２．第一志望校は直近５～６年を一通りやる。直近３年は２～３回やる。第二・三志望は直近３年分を最低、１回はやる。（私立中学・私立高校受験）

３．過去問題演習用のノートを用意し、解答をそのノートに書く。

４．演習後は、必ず、丸付けをし、得点を出す。間違えた問題は解説を丸写しする。

５．制限時間内で解き終わらなかった場合も、全問必ず解く。ただし、どこまでで時間終了になったのか、ノートに記入し、そこまでの得点を記入する。

６．提出日に、ノートと、得点を記入した提出シートを各担当の教師に提出する。（ノートを用意するのは、解答状況をチェックし、個別フォローをするため。科目ごとに用意するのが理想。）

７．演習時間は、１回目の演習では規定制限時間で。２回目、３回目は時間を短縮して実施する。（生徒・クラスによって、短縮時間は指示する。）

８．過去問題演習は、家庭学習や塾の自習で行う。本番の試験のつもりで、制限時間中は集中して取り組む。中断したり、問題の途中で諦めたりしないこと。

９．提出後は、各科目に対して、教師より弱点補強等の課題を出す場合もある。

上記の実施方法を参考に、受験生の来春の笑顔と感動のために、是非、貴塾で過去問指導に力を入れてください。

【あとがき】

MBA セミナー第二回を９月 28 日（日）東京、10 月 19 日（日）大阪、10 月 26 日（日）福岡で、「実録　学習塾急成長の秘訣」と題して開催致します。弊社講師の他、スペシャルゲスト講師として、株式会社創英コーポレーションの豊川忠紀代表をお迎えします。創英コーポレーションが運営する創英ゼミナールは、激戦区神奈川県において急成長を遂げ続けている学習塾です。学習塾の拡大のポイントを様々なエピソードを通してお伝えいただく予定です。乞うご期待!です。

詳しくは、http://www.management-brain.com/2014/seichou.html で、ご確認ください。

合資会社マネジメント・ブレイン・アソシエイツ
教育コンサルタント　中土井鉄信

公立中高一貫校シリーズ

Vol.7「適性検査が求めるもの。それは、21世紀のグローバル社会で活躍できるかどうかの資質」

日本の教育の中には、「正解主義」というものが根強くあります。何ごとにも正解が必ずあり、それに早く到達することが評価されるのが正解主義です。時間はかかるかもしれないけれども面白い発想をする生徒は、日本の教育では残念ながらこれまでは高い評価は得られませんでした。時にはふるい落とされてきたことも否定できません。時代の流れは変わりました。すばやく正解に至ることも求められますが、思考のプロセスが大事にされ、びっくりするような発想で正解を導く生徒が評価されるようになりました。

従来型の一方通行の授業では正解主義の枠を破ることができないこと、時代の流れ、変化を受けてということもあるでしょう。公立中高一貫校では、教員が問題を提起し、それに生徒が反応する双方向的な授業を実践することで発想力のある生徒を育成しようとしています。次世代に通じる対話型の授業進行で生徒の思考のプロセスを磨いていこうとしているのです。そういう生徒の育成を前提として、それに耐えられる資質が、公立中高一貫校の適性検査では求められようとしているのです。

適性検査で求められる力の一つが、論理的思考力に基づく問題・課題解決能力です。かつて日本人は問題解決能力が低いのではないかと言われました。それではいけないと、文部科学省が課題解決型能力を重視した指導を全国的に広げていったことで、その成果として、OECD（経済協力開発機構）が加盟国をはじめ44 カ国・地域の 15 歳男女を対象に、2012 年に実施した国際学力テスト「学力到達度調査」では、問題解決能力分野の日本の平均得点が 3 位となりました。そのことは、すでに本シリーズでも紹介しましたが、問題解決能力そしてそれを支える自分で考えて判断する力、さらに自分の考えをきちんと相手に伝えるための表現力を磨いていくことは、急激に進む社会のグローバル化を考えても大変重要なことです。適性検査では、問題解決能力のほかに、情報収集力・分析力、表現力、社会認識力、発想転換力などを教科横断的な出題を通して、見ようとしているのです。今後、どこに問題があるのかを発見する能力もこれからの時代は求められてきますから、問題解決能力に加えて問題発見能力も見られるようになるのではないでしょうか。

問題発見能力よりもさらに重要となるのは、問題設定能力です。いきなり問題を設定する能力は身につけられるものではありません。まず、問題解決能力を磨き、そのつぎに問題がどこにあるのかを発見していく力が磨かれていくのです。それが身につけば、どのような問題が設定できるかというステージに立つことができるのです。

どのような問題が設定できるかを国際語である英語で話し合い、解決に向けて進めていくことができる人材が、グローバルな社会で活躍できる人材ということになるのではないでしょうか。公立中高一貫校の適性検査には、そこに至るまでの中等教育機関で鍛え上げていくにはどうするかという問題意識、それに耐えうるかどうかの資質を持っているかということを確認する意識が入っているのです。

ところで、適性検査の特徴は一つひとつの教科としてではなく、教科横断型で複数の教科を統合した形で出題されることです。そのため、一つの検査に数学的なグラフ処理を求める出題もあれば、理科的な考察をさせる出題もあります。国語としての読解力を求める設問と社会的な背景を問う設問が混在していることもあるのです。算数・理科、国語・社会に大別して出題する学校が一般的ですが、このあたりについては、受検希望校の「過去問」の出題傾向を調べ、解法作業を通じて、形式への慣れを含めてきちんと対応できるようにしておくことが大事です。次回は、適性検査での出題を通して、具体的にどのような資質が求められているかというところを検証していくことにしましょう。

公立中高一貫校対策センター（株式会社クロノクリエイト）
http://www.e-canpass.com